

ソフィア 2月号

電車の中で

偶然、となりにおられた方の会話が耳に入ってきた。

Aさん「ひいらぎってお花屋さんに売ってる？」

Bさん「ひいらぎ？お店で見たことないなあ。昔は庭にあったよね。なんで？」

Aさん「孫が、保育園行ってね、今5歳の年長クラスやねんけど。保育園の先生から節分の話を聞いてきて、ひいらぎにイワシの頭さして鬼が来ないように玄関にかざらなあかんから、おばあちゃん、ひいらぎ買ってきてー。ってたのむのよ」

Bさん「へえ、私らもこの頃、そんなんせえへんなあ」

Aさん「そうやねん、保育園って、季節のことやいろいろ教えてくれるわ。私らが忘れてたこととかも孫が聞いてきて教えてくれんねん。笑」

保育園で先生から聞いたことを、まるごと素直に受け止めておばあちゃんに話すそのお孫さんの姿が想像でき、ほほえましくなりました。と同時に、私たちは子どもたちにさまざまなことを丁寧に正しく伝えていかないといけないなあとあらためて思った場面です。

1月26日、メルボルンで行われたテニス四大大会全豪オープン戦で優勝した、大坂なおみ選手のコーチ、サーシャ・バイン氏は、優勝後のインタビューで

「人間は成功したときに2つのタイプに分かれると思うんだ。ひとつはやり遂げた満足感にしばらく浸るタイプ、もうひとつは次に目の前のあることに向かってすぐに進み出るタイプ。ぼくにとって幸いだったのは、なおみが後者のタイプだったことだ」そしてまた、「ハングリー精神は、(大人になってから)教えられない。」とも語られていました。

どこまでも前向きで失敗してもまたやり直して果敢に挑戦していく姿は、子どもが一人で歩き始める姿と重なります。どんなに転んでもまた起き上がり一人で歩こうとする。

どこまでも前を向いて挑戦する勇氣は、どの子ども、その体に、心に、細胞に、プログラムされているように思えます。

悪意がなくても否定的な言葉をかけられたその瞬間、その子どものもっていた挑戦する前向きな勇氣の一つが失われていきます。こどもにむける言葉、ふるまいを愛あるものでみたくしていきましょう。子どもたちはひとりひとりかけがえのない可能性をもっています。

鬼 谷川俊太郎

子どものころは角なんて生えてなかった。ふさふさの巻毛だった。鬼ごっこをして遊んでいた。人にいじめられて、だんだん角が生えてきた。だんだん爪がのびてきた。泣くことも忘れてしまった。

ソフィア東生駒こども園 園長 中畑直実